

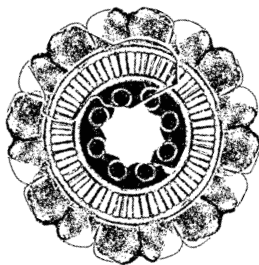
## 整理報告遺跡

# 寺前遺跡

(三島郡出雲崎町大字乙茂字寺前ほか)

遺跡の概要については、「埋文にいがた」No.58号でご紹介しましたが、今回は製鉄関連遺物について、ご説明します。製鉄に関連する確実な遺構は確認されませんでした。溶解炉の壁や鉄滓を中心に約100箱の遺物が出土しています。出土した層位は中世に属し、炉壁に付着した炭のC14年代測定では、11～12世紀前後の年代が得られていますが、それ以降も行われていたと考えられます。遺物の多くは、鑄型に鉄を流し込んで製品を作る鑄造に関するものです。中でも量の多いのは溶解炉の炉体破片です。炉体はスサ（モミ殻や稲藁）が多く入った粘土でつくられており、内面は高温で溶けています。円筒形で地面に直接据えられていたと考えられます。破片の大きさから、直径はおよそ50～70cmくらいであったと予想されます。この中に炭と製錬（砂鉄と炭を高温で熱し鉄をつくる）で得られた鉄を入れて、送风管（羽口）で風を送り、高温で熱し、鉄を溶かします。これを鑄型に流し込んで製品をつくっていきます。鑄型は外型と内型があり、その間に鉄を流し込むこととなります。また、溶鉄を流し込む小型の坩堝破片もあります。

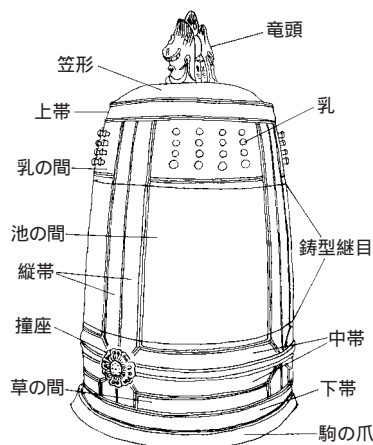
鑄型では梵鐘及び鍋、羽釜、仏具があります。梵鐘は一番下部の「駒の爪」、鐘を撞く部分の「撞座」、上部に突起状に付く「乳」、鐘を吊るす部分の「竜頭」の鑄型破片があります。駒の爪部分から推定すると直径は約38cmになると考えられます。撞座文様を推定復元すると外区複弁8葉で、その内側に圏線を有する雄蕊帯がめぐり、中心の中房には1+8の連子が配されます。現在類似の撞座文様があるか調べています。県内で中世の梵鐘鑄型が確認されたのはこれが初例になります。梵鐘は銅鐘が一般的ですが、鉄鐘の可能性もあります。鑄型はこわして製品を取り出すため、全て細かく砕かれてしまいます。ここで作られた梵鐘は近くの寺に収められたものと思われる。すぐ近くに多聞寺と言う寺があり、遺跡名（字名）が寺前（寺の前）というのも何か関連があるのでしょうか。



復元した撞座文様



梵鐘撞座鑄型



梵鐘各部位名称

坪井良平1970「日本の梵鐘」より

鍋や釜は、鑄型が逆さ状態で、底部分から溶鉄を流し込みますが、注ぎ口（湯口）部分が漏斗状の円錐形になっており、注ぎ終わった時に湯口部分にたまった溶鉄が円錐状に固まります。これを丸湯口鉄塊といいます。鑄造を行った証拠の一つです。寺前遺跡では複数出土しています。ここで作られた可能性のある鍋吊り手部分の破片もあります。

鑄造を行ったのは専門の鑄物師集団であり、どこから来たのかはわかりませんが、これらの製品を発注した有力者が寺前遺跡にいたこととなります。（高橋 保）



鍋破片(上:口縁、下:吊り手部分)



丸湯口鉄塊